



ニイハオ 你好



茅盾(左)と茅盾の生家(右)



茅盾故居

中国文学界の巨匠茅盾氏は、本名沈徳鴻、字は雁冰。1896年嘉興市桐郷県烏鎮に生まれました。北京大学卒業後、チェーホフ、モーパッサンの短編を紹介するなどして文学活動を始め、「人生、社会のための文学」を主張。1924年以後は革命運動に加わり、27年には武漢政府のもとで宣伝活動に従事しましたが、国共分裂によって武漢を離れて上海に帰りました。しかし、革命文学派から批判され、1928年日本に亡命、30年に帰国後、中国左翼作家連盟に加わり、魯迅とともに指導的な役割を果たしました。解放後は文化部長に就任しています。

彼の代表的な短編小説「春蚕」「秋収」「残冬」「林商店」などは、生まれ故郷烏鎮の街を背景に書かれています。茅盾氏の生家には、彼の当時の写真や生活用品、少年期の作文、各種出版物などが陳列されています。

新年あけましておめでとございます。さて、ことしは辰年。市内に頼もしく福を招きそうな辰の壁画があるのを御存じでしょうか。鷹岡公民館の北側にある浅間保育園の壁画です。明るく元気な子供たちを背中に乗せて空を飛ぶ姿は勇壮です。御近所の皆さん、初もうでの後でごらんになったらいかがでしょうか。

こちら編集室

どんど焼き

小正月の行事



一月十四日はどんど焼きの日です。どんど焼きは、地方によって呼び名があり、伊豆では「オンベヤキ」、「ドンドン」、駿東地方では「サイトヤキ」、富士、静岡方面では「ドンドンヤキ」、「オンベヤキ」などと呼ばれています。オンベは御幣(紙や布を切り、細長い木に挟んで垂らした神祭用具)、ドンドはその燃え盛る形容、サイトは道祖神が祭られるような村の境界を意味していると言われます。

十三日の夜、けい子ちゃんの家では、お米の粉をこねて、赤、白のおだんごをつくり、ミズキの枝に刺しました。お父さんが神棚にお灯明をあげ、「お米や野菜がよくできますように」と、お祈りしながらだんごをお供えしました。それから、大きなおだんごをつくって長い棒に刺して、どんど焼きの支度をしました。さあ、いよいよ十四日の夕方

「どんどやーき、十四日、サールのケツはまつかつか」隣のお兄ちゃんが大きな声を出して出かけて行きました。おだんごのついた長い棒を担いでけい子ちゃんも出かけました。広場には、オンベ竹を立て、その周りに正月のお飾りや古くなった神様のお礼、目玉の入ったたるまひげの取れたおひな様などが、高く積み上げられています。火をつけると、勢いよく燃え上がり、熱くて顔を向けていられません。火の中へ投げ入れた書き初めが、高く舞い上がるのを見て、「字が上手になる」と言っています。火が小さくなるのを待っておだんごを焼きます。こんがり焼けたおだんごをけい子ちゃんの家では「ことし一年、風邪を引かないよ。虫歯にならないよ」と言って、家中みんなで分け合って食べました。

地名の由来

青島 (吉原地区)



この村は、初め今の位置より東寄りにありましたが、万治年間(一六五八年〜一六六〇年)にあった洪水で現在の地に移ったということです。

青島村と呼んだのは、富士川か潤井川をつくった砂州に草木が茂っていた所だったからなのかも知れません。開拓の時期は津田村や依田原と同じころのようですが、その経緯は明らかではありません。江戸時代に名主川口市郎兵衛が農民を救った話は有名です。